

平成三十九年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(二回)

# 国語

## 注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は□から□、2ページから18ページまであります。  
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□ 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。なお、作問の関係上、一部省略した所があります。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

かつては日本でも、子どもの将来のために、①厳しい社会の荒波に耐えられるように、そして力強く自分の道を切り開いていくように、あえて心を鬼にして厳しく育てるということがあったが、一九九〇年代頃から、教育評論家たちが文化的風土の違いを無視して、アメリカ流の言葉でほめる子育てを推奨したため、日本中に「ほめて育てる」「叱らない子育て」が広まった。

その結果、教育的配慮に欠けた甘い子育てが横行することになった。

子どもの将来のために厳しく育てようとする親と、目の前の子どもの笑顔が見たい、叱ったりして気まづくなりたくない、一緒に楽しく過ごしたいという親。どっちがやさしいだろうか。

子どもを叱れない理由として大きいのが、「嫌われたくない心理」だ。

「お母さんはすぐ怒るから嫌い。お父さんはやさしいから好き」

と子どもから言われ、ショックを受けたという母親がいた。子どもから嫌いなどと言われれば、だれだって気になってしまうものである。そこで、つい叱りにくくなり、甘やかしてしまう。そんな親が少なくないようだ。

でも、そのように言う子どもの「嫌い」とか「やさしい」といった未熟で感情的な言葉に大の大人が振り回されて、子育ての使命を忘れてしまうのもどうかと思う。

本来、親と子の関係というのは、好かれないとか嫌われたくないとかいう関係ではなく、もっと深い結びつきがあるはずだ。

②子どもから見て、「子どもから嫌われたくない」という思いが透けて見える親は、どこか頼りなく感じられるはずである。

子どものためを思ったら、たとえ子どもから激しく反発され、一時的に嫌われるようなことがあっても、親として厳しく注意しなければならぬこともある。

子どもに嫌われたくないという思いが強い親は、「子どものため」ではなく③「自分のため」に子どもにやさしくしているのである。それがやさしいのかどうかは別として。

子どもの将来のためを思ったら、あえて厳しいことを言って憎まれ役を買うのも重要な親の役目だろう。そんな憎まれ役をわざと他人が買って出してくれることはまず期待できない。④親だからできるのだ。

子どもに嫌われたくないから甘くしているという親と、子どもに嫌われるかもしれないがわが子が⑤将来困らないために厳しくしつけるようにしているという親。どっちがほんとうにやさしいかは一目瞭然のはずだ。

かわいそうだからダメと言えず甘やかすという親もいる。

子どもをあまり叱らないという親は、ほめると子どもはすごく嬉しそうな顔をするけど、叱るとシウンとしたり泣いたりしてかわいそう、だから叱らないようにしている、というようなことをよく口にする。

だれだって叱られれば落ち込む。そんなわが子を見れば、かわいそうという気持ちも湧いてくる。

しかし、そんな⑥近視眼的な同情は、けっして子どものためにならない。叱られたときは落ち込んで、かわいそうかもしれないが、歪んだ行動や自分勝手な態度が改まらないままに大きくなったら、将来もっと深刻な意味でかわいそうなことになる。

現に、甘やかされて育ち、好ましくない行動やわがままな態度が改まらずに大きくなったため、友だちから信頼されずに悩む人や、職場で信頼されず、取引先からも信頼されずに、仕事で支障が生じている人物もいる。

結局、叱るのはかわいそうという親は、じつは自分のことしか考えていない。子どもにやさしいのではなく、自分に甘いのであって、子どもの将来を考えてあげていない。自分が死んだあと一世代後まで生きていくたくましさや身につけさせなければという思いがない。⑦ペットをかわいがるように子どもと親しんでいる。

そのような親は、子どもが自立し、親から距離を取っていくべき中高生の年頃になっても、子どもから頼られたい、甘えられたいと思いい、自立に向けて突き放すことができない。

子どもの側も、そんな親の気持ちをごどこかで感じ取り、自立すると親が淋しがるといった思いをもつようになる。そうしているうちに、いつまでも親に甘え、親を頼る、自立の力の乏しい若者になっていく。

当然それは子どものためにならない。子どもは一世代後を生きていくわけだから、自分なしでもちゃんと生きていけるように徐々に突き放していくのが親としての愛情であり、やさしさのはずだ。

親自身は淋しいだろうが、その淋しさは子どもの将来のために堪え、あえて厳しく突き放すのが、親としての使命感に則ったやさしさだろう。

大阪市の幼稚園の先生たちを対象に私が実施した調査では、最近の親を見て気になることとして、ほぼ半数（四七％）が「子どもをしつけないという自覚のない親が目立つ」という。

このように見てくると、子どもとただ楽しく戯れている親は、けっしてやさしいとは言えないだろう。

ほんとうにやさしい親は、もっと長期的な展望のもとに子どもを育てている。目の前でシュンとする子がかわいそうという視点よりも、このまま自分の歪みや弱味に気づかずになくなってしまったらかわいそうという視点に立つことができる。それがほんとうのやさしさであろう。

\*友だち親子が最近目立つということを私が言ったのに対して、学生たちがこんなことを口にした。

「今の親は威厳がなくて頼りない。もっと頼れる存在であってほしい」

「友だち親子ってよくいるけど、あきらかに世代は違うし、親と子なのに、子どもに媚売って仲良くしている親って、なんだか見苦しい。親っていう自覚が乏しいんじゃないですか」

もちろん肯定的な意見もあった。

「周りに当たり前のように友だち親子が多いけど、それは問題なんじゃないか」

「親子が友だちみたいに仲良しなことの、どこが悪いんですか」

だが、友だち親子を好む母親に自分は反抗して自立できたが、弟は反抗できず、友だち親子をずっと続け、何でも親に話すというかわりから抜け出せず、そのせいで大学生になっても友だちができないから心配だという声もあった。

また、自分の親はやさしいのかもしれないけど、こっちの機嫌を窺っているようなところがあって、何だか頼りない、親にはもつと堂々としてほしい、親が厳しく文句言ったり叱ったりする人、そんな親に腹が立つことがあるかもしれないけど、そういう毅然とした親なら頼りがいがあるって羨ましい、という学生もいた。

こちらの機嫌を窺っているような親が頼りないというのは、確かにそうだろう。親だったらもつと堂々としてほしい。そうではないといざというとき頼れない。

まだ自立への道の途上にいる不安定な若者たちは、⑧そんな思いをもって、頼れる親を求めているのではないだろうか。

子どもから嫌われたくない。反発されたくない。理解のある親と思われたい。やさしい親と思われたい。そんな思いを抱える親が増えている。

その一方で、というよりもそれだからこそ、「こうする方が子どもの将来のためだ」「どんなに反発されようが、これだけは子どもにしっかり叩き込んでおかなければ」と、自分なりの考えや価値観を体当たりでぶつけてくる親を子どもたちは求めている。そんな子どもの要求に応え、ときに厳しい面を見せ、自分の考えや価値観をぶつけるのも、⑨親としてのやさしさなのである。

〔注〕 \* 友だち親子Ⅱ友達のような関係性を持つ親子のこと。  
( 『やさしさ』過剰社会』 榎本 博明 )

問一 | 線①「厳しい社会のく厳しく育てる」とありますが、ここで育てているものは何ですか。本文中から四字で探し、抜き出しなさい。

問二 ―線②「子どもから見て頼りなく感じられる」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもから嫌われたくないというのは、大人が本来見せるべきでない内心を表面に出してしまっているという点で、子供には大人げない行為だと思われるから。

イ 子どもから嫌われたくないというのは、大人が子どもに反発されることを恐れて機嫌をとっているため、子供には堂々としていないと映るから。

ウ 子どもから嫌われたくないというのは、大人が子どもの気持ちを優先させてしまうことになり、結果として子どもに振り回されているように見えるから。

エ 子どもから嫌われたくないというのは、大人が自分の考えに自信を持ってないという弱さから、子どもと深い関わりを避けているように子どもには受け取れるから。

オ 子どもから嫌われたくないというのは、大人が子育ての本質を見失い、そのために不安を抱えているような印象を子どもが受けるから。

問三 ―線③「『自分のため』に子どもにやさしくしている」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもに厳しくすることで反抗され、結果として自分が傷つけられることを恐れてやさしくしているということ。

イ 子どもから絶えず甘えられる存在であることによって、自分の必要性を確認するためにやさしくしているということ。

ウ 子どもの将来を考えず、子どもと共に過ごす間は自分が嫌な思いをしなけばいいと思っただけやさしくしているということ。

エ 子どもからの評価を第一に考えて、親の理想像に近づけるように本来の自分を隠してやさしくしているということ。

オ 子どもを「ほめて育てる」アメリカ流の子育てが実践できているという自己評価のためにやさしくしているということ。

問四 ー線④「親だからできる」とありますが、なぜ「親だからできる」のですか。次の文の空らんに入れる適当な語句を本文中から六字で探し、抜き出しなさい。

親と子どもの間には他人にはない（ ）があるから。

問五 ー線⑤「将来困らないため」とありますが、筆者は将来どのようなことで困ると考えているのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どものころに叱られないと、大人になってから叱られたときに、そのことに慣れていないために耐えられない人間になってしまうこと。

イ 子どものころにしつけられずにいると、自分が大人になった時に子どもをしつけられず子育てできない大人になってしまうこと。

ウ 子どものころに厳しくされないと、より厳しい世の中にいきなり出ていくことになり、本人がショックを受けることになること。

エ 子どものころにしつけられないと、大人になるまで自らの言動が修正されずに育ち、社会生活をうまく営めなくなってしまうこと。

オ 子どものころに叱られないと、叱ってくれることへの感謝の気持ちが生じず、やさしいかどうかで人を判断するようになること。

問六 ―線⑥「近視眼的な同情」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の目の前で落ち込んでいる子どもを見る時にだけ、かわいそうだと思うこと。

イ 自分と直に接しているときの子どもの反応に対して、理解を示してあげたいと思うこと。

ウ 叱つたらかわいそうだという単純な思考に基づいて、子どもを甘えさせてあげようとする事。

エ 子どものためにならないことだとしても、そのときに必要なことならばやってあげようとする事。

オ 成長したときの困難を考えることなく、今は子どもにかわいそうな思いをさせたくないと思う事。

問七 ―線⑦「ペットをかわいがるように子どもと親しんでいる」とはどのようなことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ペットを飼うように、自分の手元にいつもおいて世話を焼いているということ。

イ ペットと遊ぶように、自分の気が向いたときにだけ子どもの相手をしているということ。

ウ ペットをしつけるように、日常の最低限の行動を必要なこととして教えているということ。

エ ペットに接するように、自分が楽しく過ごすという欲求を満たしているだけであること。

オ ペットを育てるように、成長を温かく見守っていくことで満足しているということ。

問八 ―線⑧「そんな思い」とありますが、どのような「思い」ですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分がまだ親の助けを必要としており、親を頼って生きていくしかないという思い。

イ 自分がまだ一人で生きていく力に乏しいため、その不安から早く解放されたいという思い。

ウ 自分が親を頼りたいときに、親がそれに応えてくれるような存在であってほしいという思い。

エ 自分が親に反発をしても、それは意見をぶつけただけで嫌いになどならないという思い。  
オ 自分が頼れる親を必要としているのは、それが自分の将来の役に立つからだという思い。

問九 ー線⑨「親としてのやさしさ」とありますが、それはどのようなことだと考えられますか。本文全体から九十字以内で答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

祖父の家を訪れた莉子は、庭の蓮池の前で不思議な体験をする。それは、早朝、蓮の花が開くのを待っているうちに、過去の世界に移動してしまい、やがていつの間にか現在の蓮池の前に戻ってくるというものだった。今日も同じことが起き、莉子が移動したのは、数年前に亡くなった母の少女時代だった。そこで「ゆきちゃん」「えっちゃん」「ふみちゃん」「よっちゃん」という四姉妹に会い、家にお邪魔することになる。「ゆきちゃん」は莉子の母であり、「ゆきちゃん」とそのお母さんはどうやら仲たがいをしているようである。「よっちゃん」がその事情を莉子にこっそり話してくれた。

よっちゃんの話は、なかなかAヨウリヨウを得なかったが、つまりこういうことだった。

先週、隣村から来たという女の子がこの家を訪れて、浴衣を貸してほしいとゆきちゃんに頼んだ。ゆきちゃんは親切心から浴衣を貸したが、そのことを畑仕事から帰ってきたお母さんに「①」打ち明けると、その浴衣はもう戻ってこないし「②」言われてしまった。いいや、絶対に返しにくるとゆきちゃんは言い張り、それ以来、二人はほとんど口をきかなくなったというのだ。

「その子は、すぐに返しにくるって約束したんに、いつまでたっても来てくれんの。それでゆきちゃん、すぐくあせつとるん」  
だつてな、明日は鎮守様\*1ちゃんじゆさまの宵宮よいみややもん、宵宮よいみやで着るために、お母さんが縫ぬってくれた浴衣ゆかたやもん、と、よっちゃんは言った。  
「今日返しにこんかつたら、どうなるんやろう。去年の浴衣ゆかたで宵宮よいみやに行くんやろうか。でも、去年の浴衣ゆかたはえっちゃんが着ること  
になつとるしなあ……」

昼食のあと、ゆきちゃんが急いで外へ飛び出していったのも、家の門の前で、その女の子がやって来るのを待ちうけようとして  
のことらしい。

「ゆきちゃんのところに行ってみようか」

莉子りこのことに、うん、とよっちゃんもうなずいた。

昼食のあと片づけをして外に出ると、ゆきちゃんは門の前でひとり、そわそわと落ち着きのない様子で車道のほうをながめてい  
た。

「ゆきちゃん、おうえんに来たよ」

よっちゃんが手を振ふってさげぶと、ゆきちゃんはたちまちBケワシイ顔かほつきになった。

「応援おうえんやて？ あんた、その人にしゃべったん？」

「ええと、あのね……」

よっちゃんは、莉子りことゆきちゃんを交互こうごに見比べてから、「③」首くびをすくめた。

「全部はしゃべつとらん」

「全部も少しもいっしょや。このおしゃべり」

よっちゃんが泣きそうな顔かほになったので、莉子りこはあわてて、

「わたしが言ったの。ゆきちゃんのところに行こうって」

と続けた。

「いっしょに待っていい？」

「別に。かまわんけど」

莉子はよつちゃんの手を取り、門の前にあるお地藏さまの横に腰をおろした。そうして、何気なくお地藏さまのほうに目をやった。なんて人間らしい、愛くるしい面立ちをしているのだろう。

「それは、うちの一番上の姉さんや」

と、ゆきちゃんが言った。

「うちが生まれてすぐに亡くなったんやて。枇杷の実が大好きやったけえ、枇杷の木をいっしょに植えてやったんやて」

「④ そうなんだ……」

これまで祖父も、親戚の人たちも、一度もそんな話をしてくれたことがなかった。でも、みんなはきっとお地藏さまや枇杷の木を見るたびに、その小さな女の子の無邪気な笑顔や、かわいらしいCシグサを思い起こしていたのだろう。

「うちは、あの子を信じとるよ」

ゆきちゃんが唐突に言った。

「お母さんのいつもの癖や。すぐ人を悪人やて決めつける。そりゃあ、世の中には悪い人もおるやろうけど、そうじゃない人だつてちゃんとおる。あの子はぜったい、浴衣を返しにくる」

と、⑤ まるで自分に言い聞かせているように。

莉子は、うんうんと、相づちを打ちながら、どうかその子が来てくれますように、ゆきちゃんを失望させませんようにと、祈らずにいられなかった。

けれども、いつまで待っても、それらしい女の子は現れない。昼さがりの時間は刻々と過ぎていき、すっかり飽きてしまったよ

つちゃんは、ため息をついて空を仰いだり、草むらの中に寝ころんだり。あげくには、おなかすいたあ、おうちに入ろう、と、だだをこね始めた。

そのうち、出かけていたえっちゃんとふみちゃんも帰ってきたので、

「ええよ、うちがひとりで見張りをする。あんたらもう戻るとき」

と、ゆきちゃんに言われ、莉子はみんなといっしょに家の中へと引きあげた。

( 中略 )

「ちよつと、ちよつと」

隣の蚊帳から、ふみちゃんの声がした。

「お母さんが、ゆきちゃんの部屋に行ったよ」

よっちゃんは、「ほんま？」と言って立ちあがり、蚊帳の外へと出ていった。

「あんたら、やめとき」

というえっちゃんの声を振り切るようにして、莉子も電気スタンドを消し、二人のあとを追いかけた。

ふみちゃんに続いて、よっちゃん、そして、莉子。そろって足音を忍ばせ、ゆきちゃんの部屋の前まで行くと、先頭のふみちゃんがふすまをほんの少しだけ、音をたてないようにしてそうつと開けた。

「ほんまや、お母さんがおる」

よっちゃんの声に、ふみちゃんは振り返り、しいつ、とすぼめたくちびるに人差し指を当てた。

折り重なるようにしてふすまに張りつく二人のうしろから、莉子は背伸びをして部屋の中の様子をうかがった。

「ゆきちゃん、少し食べんかね」

ほの暗い電灯の下に、二つの影が浮かびあがって見えた。文机の前にかしこまっているゆきちゃんの中に、お母さんがやさし

く話しかけている。

「おなかすいたやろう。おにぎり、ここに置いてくけえ」

すると、ゆきちちゃんは背中をむけたまま、⑥がまんしていたものを一気に吐き出すようにしやべり始めた。

「あの子、親戚しんせきの人が遠くから訪ねてくるんに、浴衣ゆかたがないけえ、一日でええから貸してくれんって言うたんや。すごく悲しそう顔してな、なんかわけがあるんやろうか、かわいそうな子やなあって思うたんや」

お母さんは、黙だまってゆきちちゃんのことばを聞いている。

「そやから、たんすの中から好きな浴衣ゆかたを持つてってええよって言うたん。そしたらあの子、一番きれいなのを出して、これ貸してって。他にもいっぱい浴衣ゆかたはあったんに、よりにもよってあの浴衣ゆかたを。お父さんが街で買ってきてくれた、あの一番ええ浴衣ゆかたを持つていってしもうたんや」

「そうやったんかね」

「何度も何度も、ありがとう、って。明日ぜったい返しにくるけえなって。それなのに……」

ゆきちちゃんは、それから先のことばを詰つませた。

「ゆきちちゃん、泣いとるよ」

よつちゃんの声に、ふみちゃんが再び、しいつ、とたしなめた。

お母さんは、かたわらに置いていた風呂敷包ふろしきみを手に取り、それをゆつくりと広げていった。

あっ、と思わず声をもらしそうになった。包みの中から出てきたのは、見覚えのあるトンボ柄がらの浴衣地ゆかたじだった。

「お父さんはな、あんたとおそろいで、お母さんの分もって、生地をよけいに買ってきてくれとったんよ。あんた、これで浴衣ゆかたを縫ぬってみんかね？」

ひくん、としやくりあげてから、ゆきちちゃんは片手で涙なみだをぬぐった。それから、おもむろに振り返り、

「お母さんの分は？」

と、聞き返した。

「お母さんは去年のがあるけえ、あんたにこの生地をあげるいね」

「そやけど、うち、浴衣なんか縫うたことない」

「縫えるいね。お母さんがあんたの歳のころには、もうちゃあんと縫うとったよ。教科書もあるし、わからんところは教えてあげる」

「宵宮は明日やん。⑦もうぜったい、間にあわん」

「今から縫えば間にあういね。だいじようぶ、お母さんも手伝ってあげるけえ」

ゆきちゃんは、もう一度涙をぬぐってから、黙ってこっくりとうなずいた。

( 中略 )

莉子の目の前には、朝陽をいっばいに浴びた蓮池がある。

ふつくと広がった蓮の花びらの内側には、銀の粉を散りばめたような無数の光が宿っていて、きらきらとまばゆい輝きを放っている。

顔をあげると、金色に輝いていた月はすでに色を失い、それでも空の高い位置に悠然と居座って、はるかな下界を見おろしていた。

(あれからわたし、どうしたんだっけ)

\*2 よっちゃんといっしょに蚊帳の中にもぐりこんでから、その先のことを、莉子はなんとか思い出そうとしていた。

(よっちゃんの寝顔を見ているうちに、わたしも眠ってしまったんだろうか……)

そのへんのところ、どうもよくわからない。

ゆつくりと立ちあがり、腕<sup>うで</sup>を振りあげて大きく伸びをする。

なんだか、とても満たされた気分だった。おしやまなよっちゃん。おしやべり好きなえっちゃんとふみちゃん。そして、しっかりとしているようにいて、照れ屋で、「⑧」で、泣き虫のゆきちゃん。

わたしが会ったゆきちゃんは、「わたしのお母さん」ではなくひとりの少女として、あの時代の瞬間<sup>しゅんかん</sup>、瞬間<sup>しゅんかん</sup>に、生き生きといのちを輝<sup>かがや</sup>かせていた。

ひんやりとした朝の空気を胸いっぱい吸いこんでから、莉子<sup>りこ</sup>は寝間<sup>ねま</sup>に戻り、枕<sup>まくら</sup>もとにたたんでおいたトンボ柄<sup>がら</sup>の浴衣<sup>ゆかた</sup>を手にとった。

衿<sup>えり</sup>に、袖<sup>そで</sup>に、身ごろに運ばれた、ひと針、ひと針の糸のあと。決して規則正しいとは言えない、そのつたない手仕事をながめながら、ほの暗い電灯の下、⑨背<sup>ゆかた</sup>中<sup>かた</sup>を丸めて一心に浴衣<sup>ゆかた</sup>を縫<sup>ぬ</sup>うゆきちゃんの姿<sup>すがた</sup>を思い浮かべた。

( 『夏の朝』 本田 昌子 )

〔注〕 \*1 鎮守<sup>ちんじゆさま</sup>様の宵宮<sup>よいみや</sup>Ⅱ「鎮守<sup>ちんじゆさま</sup>様」はその土地を守る神またはその神をまつる神社のこと。「宵宮<sup>よいみや</sup>」は祭日の前夜な

どに行う小祭のこと。

\*2 よっちゃんといっしょに蚊帳<sup>かや</sup>の中にもぐりこんでからⅡゆきちゃんの部屋をのぞき見をしていたことをえっちゃんに叱<sup>しか</sup>られた三人は、あわてて蚊帳<sup>かや</sup>の中に戻り、寝<sup>ね</sup>たふりをしたが、そのうちによっちゃんは眠<sup>ねむ</sup>つてしまう、という場面が直前<sup>ちゆうりやへ</sup>の(中略)にある。

問一 空らん「①」「②」「③」に入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ① ばつが悪そうに ② 得意満面で ③ 意気揚々と  
イ ① 得意満面で ② 頭ごなしに ③ ばつが悪そうに  
ウ ① 神妙に ② 意気揚々と ③ 得意満面で  
エ ① 意気揚々と ② 神妙に ③ 頭ごなしに  
オ ① 頭ごなしに ② ばつが悪そうに ③ 神妙に

問二 —線④「そうなんだ……」とありますが、この時の莉子の気持ちとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かわいらしいお地蔵さまが亡くなった女の子をモデルにしていると聞き、悲しむ一方で彼女の生前の可憐で無邪気な様子を想像してほほえましくなっている。

イ 母には幼くして亡くなった姉がいたという事実を初めて知ったことに困惑しつつ、自分だけがのけ者にされていたことへの疎外感を抱いている。

ウ 愛らしいと思ったお地蔵さまは母にとって姉に当たる女の子の形見だと聞き、未だに彼女を大切に思う姉妹間の愛情に揺り動かされている。

エ お地蔵さまが幼くして亡くなった女の子のためのものだと知り驚いたが、彼女に向けられ続ける周囲の愛情を感じ、どこかあたたかな気持ちになっっている。

オ お地蔵さまが亡くなった女の子の供養のために作られたと知り、最初に人間らしくて愛くるしいと感じた理由が分かり、納得している。

問三 —線⑤「まるで自分に言い聞かせているように」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 莉子たちに向けて話しながら、自分の中に芽生えそうな不安や疑念を打ち消そうとしているということ。

イ 莉子たちに話をするとともに、長時間待つことに嫌気がさしてきた自分をいさめようとしているということ。

ウ 莉子たちと他の話をしていても頭から離れない腹立たしさを、声に出すことで振り払おうとしているということ。

エ 莉子たちに対しても、自分自身に対しても、初対面の人を疑う母の愚かさへの批判を表明しているということ。

オ 莉子たちから同意をもらい、だんだんと弱気になってきた自分を奮い立たせようとしているということ。

問四 —線⑥「がまんしていたものを一気に吐き出すようにしゃべり始めた」とありますが、ゆきちゃんがこのような行動をしたのはなぜですか。ゆきちゃんが「がまんしていたもの」の内容を説明しつつ、百字以内で説明しなさい。

問五 —線⑦「もうぜったい、間にあわん」とありますが、ゆきちゃんがこのように言う理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母さんの提案はありがたいが、それに従うのは腹立たしいので、だだをこねて困らせようとしたから。

イ お母さんの唐突な提案は非現実的なので、その欠点を冷静に指摘し、拒否しようと思ったから。

ウ お母さんの思いがけない提案に一筋の希望を見出し、心が傾きながらも、まだ決心がつかないから。

エ お母さんの余計な提案を断つたのに引き下がってもらえず、うんざりして絶対に逃れようとしたから。

オ お母さんの提案は名案だが、お母さんにごまんをさせるのは申し訳ないので、どうにか断ろうとしたから。

問六 空らん「⑧」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頑固                      イ 意地悪                      ウ 前向き                      エ 利発                      オ 臆病

問七 ー線⑨「背中を丸めて一心に浴衣を縫うゆきちゃんのを思い浮かべた」とありますが、この時の莉子の気持ちとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夢中で縫ったのだらう浴衣を見ているうちに、一人の女の子として一瞬一瞬を必死で生きていた母のように、自分も心を込めて生きようと決意している。

イ 自分にとつては特別な母も、昔は自分と同じように不器用な一人の女の子だったと思うと、ほほえましくもあたたかな気持ちになつている。

ウ 一人の女の子として、母が一瞬一瞬を懸命に生きていた証である浴衣が完成するまで、過去の世界にとどまっていたかったと後悔している。

エ 優しい家族に囲まれて育った一人の女の子という母の一面に触れ、改めて母のことが恋しく、切なさをこらえきれなくなっている。

オ 一瞬一瞬を精いっぱい生き、目の前の浴衣も一生懸命縫ったのだらう一人の女の子だったころの母を、尊く、好ましく思い返している。

問八 ー線A「ヨウリヨウ」、B「ケワシイ」、C「シグサ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(一画一画でいいいにはっきりと書くこと。送り仮名が必要な場合、それも解答らんに書きなさい。)







受験番号				
1	1			

氏名

一

問一
自
問二
立
問三
の
力
問四
結
び
問五
つ
き
問六
オ
問七
エ
問八
ウ

問四
深
い
結
び
つ
き
問五
エ
問六
オ
問七
エ
問八
ウ

問九					
つ	る	来	真	す	今
け	よ	を	に	る	子
て	う	思	頼	の	ど
厳			れ	で	も
し	自	て	る	は	か
く	分		親	な	ら
育	の	自	と	く	嫌
て	考	立	し		わ
る	え	し	て	子	れ
こ	や	て		ど	る
と	価	生	子	も	こ
	値	き	ど	に	と
	観	て	も	と	を
	を	い	の		心
	ぶ	け	将	て	配

三

問一
イ
問二
エ
問三
ア

問四						
く	か	て	か	浴	、	お
な	け	い	つ	衣	女	母
つ	て	た	た	を	の	さ
た	く	が	悲	貸	子	ん
か	れ	、	し	し	を	と
ら	た	お	み	た	信	け
。	た	母	を	の	用	ん
	め	さ	ひ	に	し	か
	、	ん	と	返	て	を
	こ	が	り	し	一	し
	ら	優	で	て	番	て
	え	し	が	も	き	い
	き	く	ま	ら	れ	た
	れ	声	ん	え	い	た
	な	を	し	な	な	め

問五
ウ
問六
ア
問七
オ

問八
A
要
領
B
険
しい
C
仕
草
(種)

2点×3

6
---

12点

12
----

5点×6

30
----

12点

12
----

5点×8

40
----

得点

100
-----